

牧野富太郎が見た四日市



そらんぽ四日市  
ホームページ

このほど楠交流会館に保管されていた古い植物標本970点が当館に移管されました。その内912点は、今から約120年前の明治35（1902）年から明治37（1904）年にかけて、四日市ゆかりの植物研究者今井采蔵くぬぞうが同僚の植松栄次郎の協力や「日本の植物学の父」牧野富太郎の指導を受けて製作したものです。標本自体の劣化は見られますが、手書きのラベルには「牧野富太郎博士命名」というスタンプを押したのもあり、大変貴重なものです。

そこで、当館では朝の連続テレビ小説「らんまん」の主人公のモデルとなった牧野富太郎と本市の関わりを紹介

するとともに、市内で採集された標本を選んで当館3階常設展示時空街道内「白里亭」で5月7日まで展示します。

また、ミュージアムショップでは、牧野富太郎の出身地である高知県にある高知県立牧野植物園の協力を得て、さまざまなグッズも販売しますので、ぜひご来館ください。



展示イメージ

☎ 博物館・プラネタリウム (TEL) 355-2700 (FAX) 355-2704

川を横断する水路!? 三十三間筒さんじゅうさんげんどう

環境省選定の名水百選に選ばれたこともある桜地区ちしやくの智積養水ですが、このきれいな水はどこからどうやって流れてくるのでしょうか。

智積養水の水源は、北方へ1.8km離れた菰野町神森の「蟹池」です。現在は、3～4m四方の小さな池ですが、鈴鹿山脈からの伏流水が湧き出し、とてもきれいな水をたたえています。

昔から水不足に悩まされていた智積村の水田を潤すために、蟹池からの用水路（智積養水）が計画されましたが、間に流れる金溪川かんだにを越えて水を運ぶ必要がありました（金溪川には安定した水量がなかったようです）。その方法と

して行われたのが、川底に埋樋うめこい（四角い筒状に組んだ水路）を置くというものでした。当初は木製で、正徳元（1711）年に石製に変えたと『智積村地誌』にあります。その長さが33間（約60m）なので、三十三間筒と呼ばれました。

智積養水として実現した人々の思いや技術は今も引き継がれていて、さらに私たちに心の潤いも与えてくれます。水路の護岸にも歴史が感じられ、散策にお勧めです。



三十三間筒の出水側

☎ 文化課 (TEL) 354-8240 (FAX) 354-4873